様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ６ 日現在

機関番号：３４５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１１５３７

研究課題名（和文）看護過程・看護診断過程に関連するメディア・内容・送り手分析に基づく看護教育の検討

研究課題名（英文）Examination of the nursing education based on the analysis of media, contents and senders associated with the nursing process and the nursing diagnosis process

研究代表者
久米　弥寿子（Kume, Yasuko）

武庫川女子大学・看護学部・教授

研究者番号：３０２７３６３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、看護記録作成における看護師の思考・感情・行動と看護記録の実態を明らかにすることを目的とした。看護師の思考・感情・行動については、女性看護師13名への半構造化面接を行い、思考11カテゴリー、感情5カテゴリー、行動10カテゴリーを抽出した。看護記録については、無作為抽出で全国3513施設への自記式質問紙調査を実施した。969件回収（回収率27.6%）のうち967件（有効回答率99.8%）を分析し、電子・紙媒体の両方の使用が45.4%であり、看護過程は57.2%が使用し、看護診断使用施設は30.6%であった。記録の質的向上や記録量の負担軽減のニーズが高く、記録の多様性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted with the aim to find out the real situation of the nursing records as a media of recording and the actual thought, emotion, and behavior of nurses for nursing records. The semi-structured interview was conducted on 13 female nurses and 11 categories for thought, 5 categories for emotion and 10 categories for behavior were extracted. For the nursing record, the survey with self-administered questionnaire was conducted to 3513 facilities nationwide that had been picked out with random sampling. Among 969 recovered answers (recovery rate: 27.6%), 967 answers were analyzed. As a result, it was found that 45.4% of the subject facilities were using both digital and paper media, among which nursing process accounted for 57.2% and nursing diagnosis accounted for 30.6%. Also, it has become clear that the demand is high for the improvement of the record quality and reduction of the recording volume, and there is a wide diversity of nursing records.

研究分野：基礎看護学

キーワード：看護教育　看護記録　記録媒体　看護過程　看護診断

１．研究開始当初の背景

1960 年代より Yura と Walsh が「看護過程」に基づく看護実践を明確化したことによって、思考過程に基づく看護という考え方が示された。日本においては、それに遅れ、日本看護科学学会用語委員会が看護過程について「看護を実践するものが、独自の知識体系に基づき対象の必要に的確に応えるために、看護により解決できる問題を効果的取り上げ、解決するために系統的、組織的に行う活動である」と定義し（日本看護科学学会, 1989)、看護実践が (1)情報収集、(2)問題の明確化、(3)計画立案、(4)実施、(5)評価の５つのステップによって行われることを示した。看護活動を行うということは、看護の範疇において問題解決的思考に基づき、援助の必要性や援助内容を導き出し、それを実施して評価するという一連のプロセスを踏むものであることの表明がなされた。

看護記録を記載する媒体としての電子カルテ導入状況について、海外の調査では、一般開業医の 78% はなんらかの電子カルテ（EHR）を使用している（Chun-J. H., & Esther, H., 2014)。日本においては、電子カルテシステムの導入率は、全体で 27.3%、400 床以上の病院では 70.1%という報告があり（保健医療福祉情報システム工業会、2016)、病院規模での電子カルテ導入率には違いがある。

こうした状況に加え、看護系大学の増加や医療システムの変化に伴って、看護学生が教育機関を卒業後に看護師として就職し、看護実践を行う場は医療施設にとどまらず介護施設や在宅など多様な現場に広がっている。

看護活動上の思考過程を記述する看護記録の形式や内容およびその看護師の捉え方については、施設や看護師それぞれで違いがあると推測される。相良らの調査（2006）では、電子カルテ使用における看護診断用語に関する問題が報告され、長谷川（2010）も電子カルテ使用に関して、看護師の看護診断用語を理解して活用する能力が重要である点を指摘している。しかし、これらの調査は、電子カルテを使用している一部の施設に限っており、看護過程という科学的な思考過程を踏むためのツールが実際にどのような媒体や内容で展開され、どのような思考過程やで認識で展開されているのかという広範囲な実態調査は十分ではない。

したがって、看護過程・看護診断過程に関する教育のあり方を検討するためには、これまでは実習先に多かった大中規模の医療機関だけでなく診療所や在宅分野なども調査対象に含み、規模や地域、施設特性の異なるさまざまな現場で看護過程・看護診断過程が実際にどのように活用されているのかを把握する必要がある。

そこで、質問紙調査により看護過程や看護診断過程の展開方法を間接的コミュニケーションとしての記録媒体や記録方法を広域な実態調査で明らかにすることに加え、コミュニケーションの送り手である看護師がどのように思考過程を踏み、看護過程・看護診断過程を認識しているのかを質的に明確にし、相互の実態から看護教育の課題やあり方を検討する必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、看護過程・看護診断過程におけるメディア分析として、看護記録の媒体や看護記録の形式、内容分析として記録内容を明らかにし、看護過程・看護診断過程における送り手分析として、看護師の看護過程・看護診断過程における思考・感情・行動的側面を明らかにすることである。またメディア分析・内容分析・送り手分析を通して、看護過程・看護診断過程の展開方法や記録の実態に応じた看護基礎教育と継続教育のあり方を検討した。

具体的には、以下のステップで進めた。

(1)看護過程・看護診断過程における送り手分析として、看護師の看護過程・看護診断過程における思考・感情・行動的側面についての半構成的面接調査により明らかにした。

(2)看護過程・看護診断過程におけるメディア分析として、看護記録の媒体は何が使用されているのか、その看護記録の形式はどのようなものか、内容分析の観点では、看護記録の内容についてと記録の改善ニーズや記録作成に関するサポートニーズを問う自作の質問紙調査票を用いて調査し、施設特性等との関連性を分析した。

(3)メディア分析・内容分析・送り手分析を通して、看護過程・看護診断過程の展開方法としての記録媒体とそれを活用する看護師の思考・感情・行動的側面を統合的に検討し、看護過程・看護診断過程がどのように展開されていて、どのような課題があるのか考察し、実態に即した看護基礎教育と継続教育のあり方を検討した。

３．研究方法

1)看護過程・看護診断過程における送り手分析：看護師の看護過程・看護診断過程における思考・感情・行動的側面

本研究の対象者は、一般病院 A に勤務し、研究参加の同意を得られた女性看護師 13 名で、内科系病棟に勤務する看護師が 5 名、外科系病棟勤務が 2 名、混合病棟勤務が 6 名であった。対象者の臨床経験年数は、約 2 年から 18 年の者がおり、平均では 9.2 ± 5.8 年であった。データ収集方法は、看護診断を決定する過程における看護師の経験内容や課題意識に関するインタビューガイドに基づいて、半構造化面接を行った。データ分析は内容分析の手法を用い（Graneheim & Lundman, 2003)、インタビューの逐語録を作成し、記述全体を文脈単位と捉えて 1 内容を記録単位とした。個々の記録単位の内容を要約し、そのテキスト内の主要な意味内容を表

す表現にすると共に思考・行動・感情の傾向や課題意識を抽出した。さらに類似性に基づき分類し、サブカテゴリー・カテゴリーへと統合した。また、分析過程がデータ内容に忠実となるように 3 名の研究者間で検討して分析の信頼性を確認した。データ収集は、2015 年 3 月～ 9 月に行った。

2)看護過程・看護診断過程におけるメディア分析・内容分析の実態調査

看護記録の媒体・形式・内容について問う質問紙調査票を作成した。具体的には、「電子媒体」「紙媒体」などの記録媒体を明らかにし、看護記録の形式に関し、情報収集用紙、経過記録、オーディット、SOAP、フォーカスチャート、クリティカルパスなどの形式、看護過程や看護診断の使用の有無等についての質問項目を設定した。

厚生労働省の平成 26 年（2014）医療施設（動態）調査・病院報告の概況に基づき、病床数別の病院・一般診療所の割合に対して層化し、北海道地方、東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、中国・四国地方、九州地方とした 7 区分の地域で、各地域の施設の割合に応じて各層からランダムサンプリングを行う層化抽出法で対象施設を選定した。また、日本看護協会の平成 25 年看護関係統計資料集のデータなどにより、看護師の就業先別の就業状況や就業先割合も参考に、診療所 975 施設、100 床未満の病院が 497 施設、100 床以上 300 床未満 497 床、300 床から 500 床未満が 401 施設、500 床以上が 390 施設、訪問看護ステーション 753 施設の計 3513 施設に郵送配布した。回答は、看護部長あるいは看護記録統括責任者による記入を依頼し、返信は個別の返信用封筒により回収した。

回収された調査票を病床数や地域、診療専門分野ごとに看護記録の媒体や記録形式、記録内容、記録の種類等の実態を χ^2 検定等により統計的な有意差の分析を行った。その結果に基づき記録形式や内容の特徴、傾向を明らかにした。

４．研究成果

1)看護過程・看護診断過程における送り手分析

看護診断決定における看護師の思考的側面では、【診断指標との照合】【診断指標・関連因子・定義の確認】【主症状・問題点からの看護診断候補の探索】【看護介入や目標から看護診断を検討】【特定の診断に関するパターン化された思考】【仮の看護診断を立案して経過をみる】【複数の看護診断の鑑別】【複数の看護診断の統合】【看護診断の決定の回避】等といった 10 のカテゴリーが抽出された。それらは、25 のサブカテゴリーにより構成した。

【診断指標との照合】では、＜より診断指標に合致する看護診断に決定＞など 2 つのサブカテゴリーが含まれていた。【主症状・問題点からの看護診断候補の探索】では、＜問題点から検討をつけた看護診断の探索＞＜症状や訴えに注目した看護診断の探索＞といったサブカテゴリーで構成した。【看護介入や目標から看護診断を検討】のカテゴリーには、＜看護介入の必要性に基づく看護診断の検討＞や＜看護診断と目標の関連性を検討＞などのサブカテゴリーが含まれていた。【特定の診断に関するパターン化された思考】では、＜特定の患者状態に結びついた看護診断＞や＜過去の経験に結びついた看護診断＞、＜一定の診断指標や関連因子に結びついた看護診断＞などのサブカテゴリーが挙げられた。【仮の看護診断を立案して経過をみる】には、＜情報が不足している状況で可能性のある看護診断をひとまずあげる＞＜判断に迷う場合の看護診断をひとまずあげる＞の 2 つのサブカテゴリーで構成した。

【複数の看護診断の鑑別】では、＜病状や制限からの鑑別＞、＜患者の状態に基づく看護介入の優先性からの鑑別＞や＜看護診断の定義に基づく鑑別＞、＜診断指標の合致数や関連因子の確認による鑑別＞、さらには＜問題点から見当をつけた看護診断の診断指標と定義の比較照合＞など 5 つのサブカテゴリーで構成した。

【複数の看護診断の統合】には、＜重複する看護介入や評価による負担や混乱を減らすための統合＞や＜優先度の高い看護診断を立案するための統合＞の 2 つのサブカテゴリーで構成した。また、【看護診断決定の回避】のカテゴリーには、＜判断しきれない看護診断決定の回避＞や＜不慣れな看護診断決定の回避＞といったサブカテゴリーが含まれた。

看護診断の決定過程における看護の行動的側面では、【診断を確定するための他のスタッフとの確認・検討】【看護診断を決定するための個人での確認・検討】【確認作業を含まない対処行動】の 3 カテゴリーが抽出され、さらに 11 のサブカテゴリーにより構成された。

【看護診断を確定する際の他のスタッフとの確認・検討】のカテゴリーでは、＜カンファレンスの機会で確認・検討する＞や＜個別に医療スタッフに相談する＞といったサブカテゴリーが含まれていた。

【看護診断を決定するための個人での確認・検討】には、＜確認のために「NANDA-I 看護診断」を参照する＞、＜「NANDA-I 看護診断」をざっと見てみる＞などのまずは「NANDA-I 看護診断」を見ることに加え、＜患者や家族からの情報収集＞がサブカテゴリーとして含まれていた。また、＜院内研修資料を参照する＞や＜不慣れな看護診断に関する言葉の意味を調べる＞、＜参考資料を調べる＞などのサブカテゴリーがあった。

【確認作業を含まない対処行動】は、＜看護診断ではなくフリー項目で具体的ケア方法を入力する＞＜統合した看護診断に具体

的な看護介入方法を入力する＞＜「NANDA-I 看護診断」を確認せず直接看護診断を入力する＞の 3 つのサブカテゴリーで構成した。

看護診断の決定過程における看護の感情的側面では、【看護診断をすること自体のプレッシャー感】【看護診断に伴う業務負荷の負担感】【看護診断決定時の不安感】【看護診断に対する否定的感情】【看護診断に対する否定的感情の低下】の 5 カテゴリーと 11 サブカテゴリーを抽出した。

【看護診断すること自体のプレッシャー感】では、＜看護診断を決定しなくてはならない義務感＞、＜不慣れな看護診断決定に伴う負担感＞などのサブカテゴリーがあげられた。【看護診断に伴う業務負荷の負担感】には、＜看護診断数に伴う記録量増加の負担感＞と＜評価プロセスに伴う業務の負担感＞のサブカテゴリーが含まれていた。【看護診断決定時の不安感】では、＜看護診断名決定に対する不安感＞や＜看護診断決定数に対する不安感＞という 2 つのサブカテゴリーで構成した。【看護診断に対する否定的感情】では、＜看護診断に対する苦手感＞や＜看護診断に対する抵抗感＞などのサブカテゴリーがあった。

また、【看護診断への否定的感情の軽減】では、＜院内の教育システムによる苦手意識の軽減＞と＜周囲のサポートや合意決定による負担感の軽減＞、＜ルチン化や慣れによる負担感の軽減＞という 3 つのサブカテゴリーが含まれた。

2)看護過程・看護診断過程におけるメディア分析・内容分析の実態調査

調査用紙は、969 件の回答があり（回収率 27.6%）で、うち 967 件（有効回答率 99.8%）を分析対象とした。回答は、一般病院が 403 施設（41.7%）であり、訪問看護ステーションは 211 件（21.8%）であった。ベッド数では、100～300 床未満が 203 施設（21.0%）、無床の施設も 291 施設（30.1%）であった。

記録媒体では、電子・紙媒体の両方を使用している施設が 439 施設（45.4%）であり、紙媒体のみも 284 施設（29.4%）あった。看護過程使用の有無では、使用施設が 522 施設（57.2%）と半数以上であったが、NANDA-I の看護診断を使用している施設は 279 施設（30.6%）、クリティカルパス使用は、415 施設（45.5%）であった。100 床未満では紙媒体を使用している施設が比較的多く、その他では、両方を使用している施設が多かった。

記録作成に関するサポートニーズについては、記録内容の質的向上のためのサポートや記録量の負担軽減のサポートニーズが高かった。

全国的な記録媒体の状況については、紙媒体と電子媒体の両方を使用している実態が明らかになった。また、看護診断の使用については、全国的にも約 3 割という状況であり、記録の形式及び内容の多様性が示唆された。記録作成に対するサポートニーズとしては、記録の質的向上や記録量の負担軽減のニーズがあった。これらのことから、記録媒体や内容がさまざまである実態を踏まえ、記録の形式的な面だけではなく、看護記録の質的側面を支える看護基礎教育での教育基盤の重要性を再認識した。それと共に、継続教育においては、各施設の特性や医療体制の特性などを踏まえ、より具体的な事例等に基づく実際的展開の必要性が再確認された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

Yasuko Kume, Harumi Yamaguchi (2017). Experiences of Nurses in the Process of Determining a Nursing Diagnosis and Needs for Applying a Nursing Diagnosis: Fostering Understanding to Support the Use of Nursing Diagnoses in Clinical Practice. Journal of Comprehensive Nursing Research and Care, 2, 1-10.

〔学会発表〕（計３件）

・久米 弥寿子、冨澤 理恵、山口 晴美(2018). 施設特性による看護記録のメディア分析とサポートニーズに関する全国実態調査（その２）, 日本看護研究学会第 43 回学術集会.

・久米 弥寿子、山口 晴美、冨澤 理恵(2017). 看護記録のメディア分析実態調査に基づく地域・施設特性による傾向とサポートニーズ（第一報）, 第 37 回日本看護科学学会学術集会.

・山口 晴美、久米 弥寿子、冨澤 理恵(2017). 看護診断を決定する課題における看護師の感情と課題意識の臨床経験による特徴, 第 23 回日本看護診断学会学術集会.

６．研究組織

(1)研究代表者

久米　弥寿子（KUME, Yasuko）

武庫川女子大学看護学部・教授

研究者番号：30273634

(2)研究分担者

山口　晴美（YAMAGUCHI, Harumi）

武庫川女子大学看護学部・助教

研究者番号：00750506

冨澤　理恵（TOMIZAWA, Rie）

大阪大学医学系研究科・特任講師

研究者番号：20584551

片山　恵（KATAYAMA, Megumi）

武庫川女子大学看護学部・准教授

研究者番号：60295772

上田　記子（UEDA, Noriko）

武庫川女子大学看護学部・助教

研究者番号：40757217（削除：平成 29 年 3 月 21 日）